

デリーのバス事情

ホームステイをしている間は、近くのバザール（市場）に買い物に行くのにも、奥様たちと運転手付きの車で出かけていた。デリーの繁華街をあちらこちらと連れていっていただいたにもかからわず、自分の足で歩いていなかつたせいか、デリーにいながらしばらくは市街全体の土地勘が全くつかめなかつた。

寮生活をはじめてからようやく、必要にせまられて遠出もしなければならなくなつたこともあって、一人でバスに乗ることができるようになつた。これもいろいろな人たちにオリエンテーションしていただいた上でのことである。デリーの町のなかを走っているバスは、設備の整つた立派で快適な日本のバスしか知らない人にとっては、想像を絶するものとでもいえようか、とにかくすべての点においてものすごかつた。

デリーのバスにはほとんどの場合扉がついていない。冷房の設備がないため、暑さの中、風通しを良くする必要もあるうが、バスにとび乗らなければならないことが多く、ドアがあつて



東方研究会専任研究員
清水 晶子

はじやまになる。デリーのバスには、乗るのでではなくて、とび乗らなければならず、大いなる覚悟と相当の運動神経と、さらに多少のずうずうしさが要求される。慣れないうちは、お目当てのバスが来ても、バスに殺到する人々の群に圧倒されて、ぼう然と何台ものバスを見送った。人口に比してバスの台数が不足しているのか、どこのバス停も、いつも大勢の人々であふれていた。三十分や一時間待たされることはざらである。インドでは何事も気持ちを大きく持たないと、とうていやつていけない。

乗客もさることながら、運転する方のマナーもなかなかのものだつた。バス停の停車位置にきちんと止まってくれるバスは珍らしい。暴走車のように待つている人々の中に、スピードも落とさず突込んでくるようなバスが多くて、危険極まりない。このような状態だったので、乗降に際して事故が発生しやすく、しばしば問題

となつていたが、一向に改まる様子はなかつた。

デリーには、東京のように都市を網羅する電車の交通システムは整つていない。中流以上の人々は、自分のスクーター（バイク）や車を所有している。だからバスは庶民・貧しい人々にとって、なくてはならないものである。それで、デリーの町にはバス路線が細かくはりめぐらされていて、込み入つてはいるが、そのルートさえ把握していれば、たとえ時間がかかるてもたいていの所へはたどり着ける。バスが先のような事情なので、バスの番号と車体の正面上面の案内板にヒンディー語かローマ字で書かれた行き先を瞬時に確かめて乗り込むには、それなりのテクニックを要する。バスには後部から乗車し、入口の車掌に料金を払つて、前に進み前部から降車する。乗客が乗車口のステップに足だけかけて、正に鈴生りといった状態で、外部の手すりにしがみついたまま、その重みで左側に

傾いたまま走っているバスを目にしたときは、人々のバイタリティーに脱帽した。

進行方向の左側の前半分が女性専用の席として設けられていたが、とても用をなしているとはいがたかった。ときどき、中年の体軀堂々たる女性が、平然と女性席に腰掛けている男性を叱責して、席を譲るように言つている場面に出くわすこともあつた。私はバスの中を人をかきわけていつたりするのが嫌だつたので、これは本来いけないことらしかつたが、よく前部から乗降していた。そのうち何人かの運転手とも顔なじみになつた。瞑想するシヴァ神の絵を入れた額を運転席の前にお祀りし、マリーゴールドの花輪で飾つていた運転手は親切だつた。混んでいるときは、運転席の横に出つぱつているエンジンカバーの上に座らせてくれた。バスに設えた祭壇のお香の煙が、信仰に篤いインドを実感させた。荒っぽい運転も、神様のご加護が

あれば大丈夫というところであろうか。交通規則はあつてなきが如くの強い者勝ちのインドでは、何といつても乗つてしまえばバスが最も安全である。料金の交渉をしなければいけない面倒なオートリキシャ（三輪の車）より、安くて料金の決まつているバスは、私にとつて大切な足であつた。

デリーのバス事情は、お世辞にもすばらしいとはいい難かつたが、ボンベイを訪れたとき、車掌のきびきびした仕事ぶりと、人々のスマートなマナーに関心させられた。大きなボストンバッグを持ってバスに乗つても、少しの不便も感ずることはなかつた。とはいひながら、帰国してすぐ、日本のバスのふかふかのシートに腰をおろし、ピカピカの窓ガラスごしに鉛色の冬の景色を見ながら、なぜか鮭詰めのデリーのバスのことが懐しく思い起こされた。